ロボッチイヌ

獅子文六

ロボッチイヌ

獅子文六

ロボッチイヌ

獅子

昭和三十四年七月三十日　発行

定価　二八〇円

著者　獅子文六

発行者　車谷弘

印刷者　田中昭三

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

本文印刷　理想社
色刷　半七寫真
製本　加藤制本

万一落丁乱丁の際はお買求めの書店
又は発行所にてお取り換え致します

1959 Bunroku Shishi　Printed in Japan

目次

巷に歌あらん 7
金髪日本人 27
久里岬土産 51
霊魂工業 79
楽園の春 107
一九四七年春 117
遅日 123
無頼の英霊 149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

とアからし 16
銀座にて 187
日の丸問答 197
万国の個人 219
一つの白い小さな球 225
ロボッチイヌ 235
あとがき 260

ロボッチイヌ

巷に歌あらん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

花屋の薔薇はまだ露が乾かないし、パン屋のパンはまだ温かいし、アド・バルーンの顔は緊張しているし、空はいきいきと青いし――そういう街の朝なのである。

(新宿なら新宿でいいが)殷賑区の朝は平和で幸福だ。儲かるか儲からないか、惚れられるか振られるか、まだその日の運命が、まだ誰にも決定しないのである。

すると、思い遣りのないことに、けたたましくサイレンが響く。音ばかりではない、赤い車が火の玉のように素ッ飛んでゆく。

うううウ、からんからんからんからんン。

朝の街は棍棒でドヤしつけられて、周章して跳び上った。どの家からも店からも、バラバラ人が駆け出してくる。そうして、煙は何処だと探すけれど、青空がいたずらに美しい。

尤も、この頃はコンクリート建築が多くなったので、火事は必ずしも煙を立てなくなった。完全燃焼ストーブと、同じ原理の下に、器用な焼け方をする場合が多い。大きなビルディングで、ラジエーターが大変効くと思ったら、階下の一室が罹災していた事を、翌日の新聞で知ったなぞという話も聞いている。

そこで火事を軽蔑する群集が消防自動車の後を、ワイワイ追い駆けてゆく。朝の生営をおろそかにして、角の百貨店前の大通りへ、ゴマを撒いたようにむらがった。

赤い車は、百貨店の前へ止っている。

果して、これも安全火事だ。どの窓からも、煙は噴き出さない。テラコッタ色の外壁に、午前九時の日光が長閑に照っている。とても暖かい調子で、見る人によっては、伊豆か九州の旅の誘いを受けるであろう。尖塔の上の赤い店旗にしても、「笑いは最上のサービス」という標語を、今日もお客様に繰返している。

笑いと云えば、窓から折り重って首を出した女店員の顔が、まだ化粧したばかりで、あでやかに笑ってる。お客様へサービスの笑いは、とてもこう新鮮に行かない。云わばこれは、ショッ

プガールが自腹を切って笑ってるのだから、弥次馬の見物が魅了されるのも無理ではないのだ。
「三番目の窓の端にいるのが、有名なネクタイ部のC子だ」
一人の弥次馬が通をならべた。
「しかし、どこが燃えてるのだろう。各階の窓で美人が笑ってるのをみると、たぶん地下室の食料品売場だろう。お惣菜てんぷらの鍋へ火がはいったかな」
もう一人の弥次馬が、別な通をならべた。
だが、赤い車の勤務員が、二人掛りで大きな鉄のハンドルを廻し始めると、赤い梯子が空を向いて起き上り、その赤い梯子の尖端からもう一本赤い梯子が延びだし、さらにもう一本追加され、ひどく長い梯子となって、四階の軒へ届いたのである。
一人の消防手が、猿の如く梯子を昇り始めた。一階、二階、三階……勇敢な登攀を拍手しようかと思った弥次馬が、少し考えて止めた。どうも消防手の姿がスッキリしないと思ったら、彼はバケツとブラシを提げているのだ。便器掃除屋みたいに。
「バカヤロー。降りろ、降りろ！」
「清潔屋ア！」
「剝がすと承知しねエぞ！」

弥次馬は、やっと事情を理解したのである。消防手は四階の窓と窓の間の壁面に貼りつけられた紙片を、ブラシに水をつけてゴシゴシ擦って、剝がそうとしている。その紙片が何だという事をピンと感じないようでは、現代東京市民の資格はないのだ。

「しかし、消防自動車を用いるとは、当局も考えましたねエ」

「だが、貼る方でも、うまい場所を見付けました」

「昨日、日比谷公園へ出たのを、ご存じですか」

「あれは傑作でしたナ。蜀山人調に啄木調を加え、さらに現代のセンスで生かしたところがオツでした。私の見た時はまだ墨痕リンリたるもので、どうも直接読まないと、面白味はありませんな」

「さよう。人伝てに文句を聞いたのでは、気分が出ません。月遅れの雑誌を読むようで」

群集の中で、そんなノンキな会話が聞えた。だが、一方では、殺気立った声で、

「何でもいい。ちょっと一緒に来給え」

「だって、ボ、僕は……」

「来いったら、来い！」

丈夫そうな紺背広を着た男が、髪の毛の長い素頭の青年の腕首を掴まえて、グイグイ引ッ張

っている。

こんな光景は、一昔前に流行った古映画のようなものだ。だが、一昔前と少しばかり違う処は、群集が恐怖の目を瞠っている傍観者ではなくなったことだ。

「旦那、旦那。お止しなさいよ、ツマらない。どうせまた見込み違いに決まっていまさァ。へッへへ」

「ほんとです。そンな文学青年みたいな奴の仕事じゃァありませんよ。勘弁しておやンなさい」

「かりに、そ奴が真犯人だとしたら、なおさら黙っておられンです。あの落首も見られなくなっちゃァ、民衆娯楽ゼロとなるんですからな」

さすがにこれは低声だった。しかし、紺背広の男は、忽ち群衆に囲まれてしまった。誰も安全火事には背を向けて、こっちの方を面白がってしまった。誰か何か云う度に、ゲラゲラ笑い声が起きた。

「これ！　馬鹿ァするでない！」

紺背広の男は、漫才師エンタツのような顔を皺苦茶にして、笑いだした。誰か彼の腋の下に手を入れて擽っている者がいるのだ。

その隙に髪の毛の長い青年が逃げ出した。恥ずかしそうに、頭を掻いてソロソロ逃げ出した

ところを見ると、彼もやはり寃罪であったのだろう。

2

日本の代表的二大雑誌と云えば、「中心公論」と「解造」だ。それは桜と菊であり、鯨と象であり、信玄と鎌信であり――というようなものだ。両方とも、黒と赤と白の表紙で、絵なぞを用いる不見識はない。あの黒はファッショで、赤はマルクシズムで、白はリベラリズムの謎であると、誰か知ろう。毎月十九日になると、本屋の店頭に相列んで雄姿を現わす時、その月の文化はパッと明るくなるようだと、もっぱら読書子の評判だった。

ところで、その二大燈台が、忽然として一台になってしまったのだ。「中心公論」がツブれたのか？　否。では「解造」がヘッチャッたのか？　否。

新雑誌、「解造公論」が生れたのである。

これもやはり、文芸統制のお蔭であろう。二大雑誌の並立は力の分散であり、また雑誌統制上の不便があるから、文芸院が斡旋して、併合させたのである。半官半民、文部省を直轄官庁として仰ぐ、財団法人「解造公論」社ができたのだ。二大雑誌が一大雑誌となって、表紙は国定教科書ナミに灰色と変り、六〇〇頁一冊タッタ三十銭。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.